

令和 5 年度
事業報告書

自 令和 5 年 4 月 1 日

至 令和 6 年 3 月 3 1 日

公益財団法人 大山健康財団

公益財団法人 大山健康財団
令和 5 年度事業報告書

〔 自 令和 5 年 4 月 1 日
至 令和 6 年 3 月 3 1 日 〕

本財団の令和 5 年度の事業は、令和 5 年度事業計画書に基づき、下記の事業等を行った。

I. 学術研究助成事業

本財団定款第 4 条第 1 項第 1 号に規定される学術研究助成事業は、大学、研究所、病院などにおいて、感染症の基礎的あるいは臨床的研究を行っている者及び感染症に関する疫学的研究を行っている個人で、満 50 歳以下の者を対象とする研究助成金である。令和 5 年度（第 50 回）学術研究助成事業は次の日程により実施した。受贈者は下記のとおりである。

なお、贈呈式は、令和 6 年 3 月 14 日（木）に霞が関・霞山会館において開催した。

- ・ 公募開始：令和 5 年 10 月 1 日 応募要領・申請書 195 通発送
本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同
サイト、日本感染症学会、日本寄生虫学会のホームペー
ジに応募要項を掲載した。
- ・ 公募締切：令和 5 年 11 月 30 日 応募件数：53 件
(応募内訳 細菌学分野 41 件、寄生虫学分野 12 件)
- ・ 選考委員会：令和 6 年 1 月 22 日
- ・ 理事会決定：令和 6 年 2 月 15 日

【第 50 回学術研究助成金受贈者】

(敬称略・五十音順)

氏 名	所属・役職	研究課題	助成額 (円)	選考分野
うちやま じゅんべい 内山 淳平	岡山大学学術研究院 医歯薬学域 准教授	薬剤耐性に対する高性能な人工抗菌酵素の作出基盤技術の研究開発	100万	細菌学
かがや わたる 加賀谷 渉	長崎大学熱帯医学研究所 生態疫学 助教	流行地コホートでの積極的追跡調査サンプルを起点としたマラリア防御因子の再探索	100万	寄生虫学
かねこ ひろき 兼子 裕規	名古屋大学大学院医学系 研究科眼科学 准教授	硝子体鉄濃度測定による眼内炎診断の国際共同研究	100万	細菌学
きみしま あおい 君嶋 葵	北里大学大村智記念研究所 助教	薬剤耐性（AMR）感染症治療を志向した広域・狭域スペクトル活性物質の作用機構解析	100万	細菌学
きむら こうじ 木村 幸司	名古屋大学大学院医学系 研究科分子病原細菌学 准教授	新規ナノ技術を用いた、新規細菌性髄膜炎治療法の開発に資する研究	100万	細菌学
さいとう たいぞう 齋藤 大蔵	岐阜大学応用生物科学部 助教	原虫 <i>Toxoplasma gondii</i> の潜伏感染からの活性化タイミングを決定する、分子機構の解明	100万	寄生虫学

せきね かねこ いずみ 関根(金子)伊澄	三重大学大学院医学系研究科医動物・感染医学助教	マラリア原虫スポロゾイトの肝臓感染機構の解明	100万	寄生虫学
とりごえ しょうた 鳥越 祥太	国立感染症研究所 感染制御部 任期付研究員	肺結核病変で形成されるバイオフィルムの機能の解明と効果的な結核治療法への応用	100万	細菌学
なぎ さちよ 凧 幸世	東京女子医科大学衛生学公衆衛生学講座公衆衛生学分野グローバルヘルス部門 助教	結核の高発症リスク者検出を目指した新たな手法の構築	100万	細菌学
はぎや ひではる 萩谷 英大	岡山大学病院感染症内科准教授	国際的課題となっている感染性疾患を対象とした疾病負荷研究のデータサイエンス・プラットフォームの創出	100万	細菌学
			1,000万	

II. 顕彰事業

本財団の定款第4条第1項第2号及び大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞選考規程第2条に基づき、令和5年度顕彰事業は下記の日程で実施し、審議の結果大山健康財団賞に小林 潤氏、大山激励賞に駒田謙一氏、竹内勤記念国際賞に加藤健太郎氏をそれぞれ受賞者に決定した。

なお、贈呈式は令和6年3月14日(木)に霞が関・霞山会館において開催した。

各受賞者には、それぞれ下記の賞状等を贈呈した。

- ・大山健康財団賞受賞者：賞状・記念メダル・副賞100万円
- ・大山激励賞受賞者：賞状・副賞50万円
- ・竹内勤記念国際賞受賞者：賞状・副賞30万円

- ・公募開始：令和5年10月1日 推薦依頼43通発送

本財団ホームページ及び公益財団法人公益法人協会共同サイトに推薦依頼を掲載した。

- ・公募締切：令和5年11月30日

※推薦件数：大山健康財団賞：5件、大山激励賞：3件、竹内勤記念国際賞：5件

- ・選考委員会：令和5年12月19日
- ・理事会決定：令和6年2月15日

1. 令和5年度(第50回)大山健康財団賞受賞者(敬称略)

○小林 潤こばやし じゅん 琉球大学大学院 保健学研究科長／医学部 保健学科長 国際地域保健学教室 教授
日本国際保健医療学会 理事長 国際学校保健コンソーシアム 理事長
NPO 法人メータオ・クリニック支援の会 代表理事
医師 医学博士(満61歳)

< 功労の内容 >

小林潤氏は、学校を基盤とした感染症対策の国際的推進並びに難民・貧困僻地等における脆弱性のある人々に対する長年の健康改善に関する草の根人道支援活動及び政策提言の両面から長年寄与され、これらの成果は国際学術雑誌へ数多く発表されている。

特に、2008年にはミャンマー難民への保健医療支援としてNPO法人メータオ・クリニッ

ク支援の会を設立され、15年間にわたって継続して草の根の人道支援活動を実施されるとともに2021年のミャンマー軍事クーデター直後には、避難民に保健医療分野で直接支援できる唯一の団体として、タイ・ミャンマー国境地帯の避難民20万人を対象に大型プロジェクトを展開された。さらに、小林氏が2010年に設立された国際学校保健コンソーシアムは、国際的なシンクタンクとして広く認められ、アジアのハブとなっているとともにWHO等の国際機関を支援する等の国際的政策策定を行い、同時に研修コースを運営し低中所得国の人材育成にも寄与されている。また、新型コロナウイルス・パンデミック当初から感染症対策の過度な強化は生徒へのメンタルヘルス上の副作用に至ることを警告され、アジア太平洋地域での学校閉鎖の早期取りやめに繋げられたほか、パンデミック後の学校保健政策の再構築の指針も示された。

2. 令和5年度大山激励賞受賞者（敬称略）

- ^{こまだ けんいち}駒田 謙一 国立研究開発法人国立国際医療研究センター国際医療協力局保健医療協力課
医師 日本救急医学会認定救急科専門医
(満46歳)

<功労の内容>

駒田謙一氏は、2010年から2011年にかけてJICA専門家としてミャンマーにおける主要感染症プロジェクトにおいて、輸血血液の安全性向上並びにHIV/AIDSを含む性感染症の検査・治療の質向上に多大な貢献をされた。さらに、2011年から2012年にかけてラオスにおける同国初の人口ベースの全国B型肝炎有病率調査を主導され、その調査結果は同国における疫学的状況を示すリファレンスとなっている。また、2012年より5年間JICAザンビアHIV/AIDSケアサービス管理展開プロジェクトの長期派遣専門家としてHIV高蔓延国のザンビアにおけるHIV/AIDS治療の農村部への拡大と質の向上にも多大な貢献をされた。

特に、2018年から現在に至るまでグローバルファンドの理事会に継続的に参加され現場経験を活かされた日本代表団への技術的アドバイスを通じて世界のHIV/AIDS・結核・マラリア対策の進展に大きく寄与されている。

3. 令和5年度（第6回）竹内勤記念国際賞受賞者（敬称略）

- ^{かとう けんたろう}加藤 健太郎 東北大学大学院農学研究科動物環境管理学分野 教授
獣医師 インфекションコントロールドクター 獣医学博士（東京大学）
(満49歳)

<功労の内容>

加藤健太郎氏は、20年以上に亘って熱帯地域で蔓延している原虫病に対して病態発現メカニズムの解明、現地でサンプリングした原虫の疫学解析、現地の生薬を用いた薬剤スクリーニング等を行ってこられた。

特に、熱帯熱マラリア原虫と人獣共通感染症を引き起こすクリプトスポリジウム、トキソプラズマを研究対象とされ、「One Health」の概念から感染制御に取り組んでこられた。

加えて、ナイジェリア等で使用されている伝統薬の抗マラリア効果の解析、バングラデシュの鶏でのクリプトスポリジウムの感染率の調査、フィリピンのコウモリからのクリプトスポリジウムの分子疫学解析等を行ってこられた。これらの研究成果は、著名な国際学術雑誌に多数発表されており、発展途上国における熱帯病や動物由来感染症の制圧に寄与している。

また、帯広畜産大学在職中はJICA「原虫病及び食品媒介感染症上級専門家育成」コースで発展途上国からの研究者と教育研究も行なわれた。

Ⅲ. 学術集会支援事業

本財団定款第4条第1項第3号に基づき、令和5年4月1日から4月30日の期間で本財団のホームページに募集要項を掲載し募集を行なった結果、6件の応募があり、令和5年5月25日開催の学術集会支援審査委員会及び同日開催の理事会において、下記3件の学術集会に助成することを決定した。なお、各学術集会より下記の通り実施報告があった。

1. 「グローバルヘルス合同大会2023」に40万円助成した。

- ・申請者：田村 純人（東京大学医学部附属病院国際診療部 部長・准教授）
- ・主催者：第64回日本熱帯医学会大会・第38回日本国際保健医療学会学術大会、
第27回日本渡航医学会学術集会、第8回国際臨床医学会学術集会
- ・開催責任者：嘉糠洋陸（日本熱帯医学会・東京慈恵会医科大学熱帯医学講座 教授）
（大会長） 林玲子（日本国際保健医療学会・国立社会保障・人口問題研究所 副所長）
四柳 宏（日渡航医学会・東京大学医科学研究所、同附属病院 教授）
田村純人（国際臨床医学会・東京大学医学部附属病院国際診療部 部長）
- ・開催期間：令和5年11月24日（金）～26日（日）
- ・開催場所：東京大学本郷キャンパス（安田講堂・山上会館・伊藤国際謝恩ホール・医学部講堂他）
- ・参加者数：約1,562名（一般1,176名、学生255名、招待122名、プレス9名）
- ・申請金額：50万円（総予算額：3,000万円）

【開催概要報告】

- ・特別合同企画、学会合同企画、共催シンポジウム、シンポジウム、ワークショップ、各学会企画、ランチョンセミナー、各学会受賞講演、講習会、一般口演、ポスター発表

2. 「第29回日本ヘリコバクター学会学術集会」に30万円助成した。

- ・申請者：大崎 敬子（杏林大学医学部感染症学教室 教授）
- ・主催者：一般社団法人 日本ヘリコバクター学会
- ・開催責任者：大崎 敬子（杏林大学医学部感染症学教室 教授）
- ・開催期間：令和5年6月30日（金）～7月2日（日）
- ・開催場所：日本教育会館
- ・参加者数：1,070名
- ・申請金額：50万円（総予算額：3,200万円）

【開催概要報告】

第29回日本ヘリコバクター学会学術集会は、メインテーマを“Helicobacter属研究の多様性と未来”として、2023年6月30日から7月2日の間、日本教育会館にて現地開催された。これに併せて、7月14日より一部を除く講演のオンデマンド配信を開始し、8月31日をもって終了した。その間、国内外から会員、非会員を合わせて合計1070名が参加登録した。

特別講演として、杏林大学名誉教授神谷 茂先生が登壇され、ヘリコバクター・ピロリ感染と胃内細菌叢の講演を行った。さらに、公益財団法人微生物化学研究会・微生物化学研究所の畠山 昌則先生によるピロリ菌CagAによるBRCAness誘導とゲノム不安定性の講演が行われた。海外からは、Center for Advanced Biotechnology and Medicine Rutgers University, Piscataway NJ USAからMartin J. Blaser教授の特別講演が行われた。

隔年で開催される日本胃癌学会合同企画シンポジウムは、胃癌の最新トピックス～ピロリ菌感染診断、未感染胃癌、治療法の進歩というテーマで、日本胃癌学会理事長 掛地 吉弘先生と、日本ヘリコバクター学会理事長村上 和成先生の司会により開催された。胃癌学会と日本ヘリコバクター学会の演者が交互に登壇し、大変盛況であった。さらに、国際シンポジウムが、大分大学の山岡吉生教授と法政大学の小林一三教授の司会で行われた。講演者は、Max von Pettenkofer研究所のSebastian Suerbaum教授、de Lisboa大学のFilipa F. Vale教授、Gothenburg大学のKaisa Thorell教授と小林教授で、日本と参加各国をリアルタイムにオンラインで結び、最先端の研究発表と質疑応答を行った。

学術集会恒例となった、学術集会最優秀賞受賞講演では、第28回学術集会の受賞者 幾瀬圭先生（順天堂大学）、学術賞受賞講演では、臨床の部、垣内 俊彦先生（佐賀大学）及び基礎研究の部、三室仁美先生（大分大学）が登壇された。

◇収支決算額

- ・収入の部：参加登録費（13,226,500円）、日本ヘリコバクター学会助成金（5,596,490円）、共催・協賛事業（11,352,000円）、寄付金（1,475,000円）利息（1,018円）、総収入（31,651,008円）

- ・支出の部：事前準備費（8,141,161 円）、当日運営費（20,335,008 円）、事後処理費（160,540 円）、管理費（897,612 円）、学会事務局への返還金（2,116,687 円）、総支出（31,651,008 円）
- 3. 「第 7 回日本ワンヘルスサイエンス学会年次学術集会」に 30 万円助成した。
 - ・申請者：三上 万理子（帝京大学医療技術学部臨床検査学科 客員研究員／医療法人けいしん会横浜西口菅原皮膚科 理事長・院長）
 - ・主催者：日本ワンヘルスサイエンス学会
 - ・開催責任者：三上 万理子（帝京大学医療技術学部臨床検査学科 客員研究員）
 - ・開催期間：令和 5 年 9 月 9 日（土）
 - ・開催場所：東京大学農学部弥生記念講堂
 - ・参加者数：61 名
 - ・申請金額：50 万円（総予算額：150 万円）

【開催概要報告】

2023 年 9 月 9 日 東京大学農学部弥生記念講堂（一条ホール）にて第 7 回日本ワンヘルスサイエンス学会年次学術集会を開催し、合計 61 名が参加しました。テーマは「ワンヘルスサイエンスで SDGs の達成を目指す」でした。特別講演として東京薬科大学 薬学部 臨床微生物学教室中南秀将教授に「薬剤耐性菌の特徴と日本におけるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）の変遷」をご講演いただきました。このまま有効な AMR 対策が講じられなければ、2050 年には世界で 1000 万人が AMR 菌感染症によって死亡することが予想されており、改めて AMR について考えさせられる素晴らしいご講演をいただきました。次にシンポジウム「顧みられない熱帯病」では 3 人の演者にご講演いただきました。長崎大学大学院 熱帯医学・グローバルヘルス研究科の吉岡浩太准教授に「顧みられない熱帯病（NTDs）について」、帝京大学 医療技術学部 臨床検査学科の鈴木幸一教授には「コートジボワールにおけるブルーリ潰瘍に対する統合的対策」、国立療養所多磨全生園の石井則久名誉園長には「疥癬」についてご講演いただきました。NTDs は WHO が「人類の中で制圧しなければならない熱帯病」と定義している 21 疾患で、ハンセン病などの人畜共通感染症としての側面も持ち合わせた疾患を含み、途上国で多く報告されています。その現状がよく理解できる貴重なご講演でした。グローバル社会となった現在では、日本では珍しい疾患に罹患した状態で外国人が入国している可能性が今後増えていく可能性があります。そのような場合に我々日本人医療従事者が対応できるよう、学ぶ機会が重要であると日頃から感じておりましたが、まさに学びの時間を頂戴いたしました。午後には教育講演として、日本科学未来館 経営戦略室 室長の谷村優太先生から「日本科学未来館の SDGs の取組について」として、「世界科学館デー（International Science Center and Science Museum Day）」「世界科学館サミット（Science Centre World Summit）2017」などの SDGs に向けたアクションや次世代人材育成などの活動についてお話いただきました。その後、一般演題を 10 演題発表し、活発な討論を行うことができました。最後に、本学会年次学術集会として初の試みである、学生によるパネルディスカッションを行いました。テーマは「自身の研究分野と SDGs の関わり」であり、医学部、薬学部、臨床検査学科、海洋生命学部に所属する各々の学生がプレゼンを行い、その後ディスカッションを行いました。まだ学年が若い学生たちでしたが、自分たちの専門領域と SDGs について一生懸命学び、スライドを作成して発表に挑んだようです。また互いの発表をじっくり聞き、ポイントを捉えて質問をしてディスカッションをしておりました。参加者より大変好評をいただくことができ、学生たちにとって貴重な経験となりました。研究奨励賞は帝京大学 医療技術学部 臨床検査学科の川島晃先生ご発表の「ゲノムワイドスクリーニングを用いた *Mycobacterium ulcerans* の外毒素マイコラクトンによる潰瘍形成機構の解明」が受賞となりました。

【プログラム】

<特別講演> 「薬剤耐性菌の特徴と日本におけるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）の変遷」：中南秀将（東京薬科大学薬学部臨床微生物学教室） 座長：三上万理子

【シンポジウム】

「顧みられない熱帯病」座長：後藤一雄（帝京大学医療技術学部臨床検査学科）

S-1 「顧みられない熱帯病（NTDs）について」

吉岡浩太（長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科）

S-2 「コートジボワールにおけるブルーリ潰瘍に対する統合的対策」

鈴木幸一（帝京大学医療技術学部臨床検査学科）

S-3 「疥癬」石井則久（国立療養所多磨全生園）

【会長講演】

「ワンヘルスサイエンスでSDGsの達成を目指す」三上万理子（横浜西口菅原皮膚科）

【教育講演】

「日本科学未来館のSDGsの取組について」谷村優大（日本科学未来館経営戦略室）

【一般演題】セッションⅠ・・・5題、セッションⅡ・・・5題

【学生によるパネルディスカッション】座長：谷村優大 三上万理子

「自身の研究分野とSDGsの関わり」座長：谷村優大（日本科学未来館経営戦略室）

IV. 年報作成

2023年版（年報 No.48）として、令和4年度（第49回）大山健康財団賞・大山激励賞・（第5回）竹内勤記念国際賞の各受賞者、令和4年度「第49回学術研究助成金」受贈者、令和4年度学術集会支援助成金受贈対象学術集会実施報告、その他の国際協力・浅見敬三記念 Grant(第45次派遣団報告)、令和4年度贈呈式アルバム及び令和3年度（第48回）学術研究助成金受贈者の研究業績報告を掲載し作成した。（令和5年12月発行）

V. 寄附金

国際医学研究会（慶應義塾大学医学部学生組織）の第46次派遣団に寄附金30万円を供与した。同研究会より以下の報告があった。

本研究会は創設以来ブラジルにおける活動をその原点としながら、活動地域を徐々に世界各国へと広げてきた。私ども第46次派遣団は、ブラジルとケニアの2カ国を訪問し、マラリア高度流行地域や先住民族村など日本と全く異なる環境に医の原点を求めた。また、各地の医療について学びながら、COVID-19パンデミック中の状況に関して調査を行い、COVID-19が人々の生活に与えた影響を多角的に考察した。以下に本年度の活動目標とその具体的な活動内容を記す。

1. 「医の原点」の実体験

世界には、日本とは全く異なる状況下で限られた医療資源を最大限に有効活用することで医療が届けられている地域が存在する。このような場所の医療を実体験することで、医の原点について考えを深め医師としての素質を養うこと、また、医療体系や環境の大きく異なる各国・地域の医療を体験することで、それぞれの場所における医療の価値観を理解し、日本の医療を客観的に捉えることを目標として活動を行った。

- ・ケニアにおいて、マラリア高度流行地域の視察を行い、現地の医療体制を学んだ。
- ・ブラジルにおいて、シンガー・インディオ国立公園の先住民族（インディオ）村を巡り眼科検診を行った。

2. 医学・医療を通じた国際交流

近年、国際交流の活発化は目覚ましく、医療分野における交流の必要性はより一層増加すると考えられる。それに伴い、医療従事者が国際的な視野を持つ必要性がますます高まっている。活動を通して現地医療従事者との交流を深め、自らのコミュニケーション能力を養うと同時に、現地大学をはじめとする各団体との交流の更なる発展に努めた。

- ・ケニアにおいて現地の保健スタッフと交流を深め、議論した。
- ・ブラジルの現地大学医学部において「日伯医学生会議」を開催し、ポルトガル語で医学的な話題について発表、討論を行った。
- ・サンパウロ大学にて団長の山田洋平先生が、日本における最新の小児外科学の医学的知見

について講演し、現地医療従事者と討論を行った。

- ・世界を舞台に活躍されている三田会の先輩方を訪問した。
- ・リオグランデドスル・カトリック大学病院にて現地医学生と臨床実習を行った。

3. グローバルヘルスにおける医師の役割の探求と現地への貢献

グローバルヘルスとは、医療に国境をなくすグローバル化の1つの形態で、従来のような先進国が開発途上国に対し援助を行う一方向性の形ではなく、各国の保健医療の課題を地球規模の問題と捉え、先進国と途上国の両者が双方向性に協力し解決を目指す保健分野と定義されている。グローバルヘルスにおいては、保健分野だけでなく、産業界、教育機関、官公庁の協力が必要であるとされているが、私どもはその中で医療者として果たすべき役割を探求することを目標とした。また、学生の身分ではあるが、活動の中で微力ながら現地に貢献することを重視して活動に取り組んだ。

- ・ケニアにおいて、国際協力機構（JICA）「マラリアのない社会の持続を目指したコミュニティ主導型統合的戦略のための分野融合研究プロジェクト」および「ケニア国ホマベイ地区における持続可能なスナノミ感染症対策プロジェクト」を訪問した。
- ・ブラジルのセアラ州アラカチにおいて、パンデミック以前に実施していた学童を対象とした健康診断プロジェクトを再開した。

4. COVID-19が国際医療協力に与えた影響の考察

COVID-19パンデミックの影響により、本研究会は巡廻診療や検診などの医療活動への参加を4年間中断していた。これらの医療活動はブラジル国内の団体が主体となり実施されていたが、それ以上にCOVID-19の影響を受けた分野は他国からの国際医療協力であると考えられる。COVID-19パンデミックにより多くの国際団体が渡航制限などを理由に海外事業を一時的に停止し、支援を必要としていた場所に支援が届かなくなった結果、その地域の方々の生活にどのような影響が生じたのか調査を行った。また、そこから継続的な国際協力に求められる要件を考察し、次なるパンデミックにおいて、同様の地域に住む人々の生活をどのように支援すべきか提言することを目的とし、活動を行った。

- ・ケニアのホマベイ郡およびブラジルの先住民族村において、住民や現地保護スタッフにCOVID-19パンデミックの影響についてヒアリングを行った。
- ・ブラジルにおいて現地医学生とCOVID-19がもたらした社会の変化について討論を行った。

VI. 贈呈式及び記念祝賀会

令和5年度の学術研究助成金並びに大山健康財団賞・大山激励賞・竹内勤記念国際賞の贈呈式は、新型コロナウイルス感染症が感染症法上の2類相当から5類に移行して初めての贈呈式であったが、感染防止対策（検温・手指消毒・マスク着用）を講じた上で、下記の通り行った。なお、記念祝賀会については5年ぶりに立食のビュッフェ形式にて感染防止対策を講じた上で開催した。

- ・開催日時：令和6年3月14日(木) 午前11時30分～午後2時20分
- ・開催場所：霞山会館（霞が関コモンゲート西館37階）

【贈呈式】（敬称略） （司会）岡田 護 常務理事

- ・開会の挨拶並びに選考経過報告 神谷 茂 理事長
- ・第50回学術研究助成金受贈者代表挨拶 木村 幸司
- ・第50回大山健康財団賞受賞者挨拶 小林 潤

- ・ 令和 5 年度大山激励賞受賞者挨拶 駒田 謙一
- ・ 第 6 回竹内勤記念国際賞受賞者挨拶 加藤 健太郎

・『記念講演』

【演者】 第 50 回大山健康財団賞受賞者 小林 潤

— 国際保健コンソーシアム及びメータオクリニック支援の会について —

- ・ 閉会の挨拶 建野 正毅 専務理事

【記念祝賀会】 祝辞及び乾杯 森 雄一 監事

Ⅶ. 総務事項

『理事会』（令和 5 年度）

◇第 35 回理事会

（令和 5 年 5 月 25 日）理事総数 6 名 出席者：理事 6 名 監事 2 名

1. 「令和 4 年度事業報告書（案）」の承認
2. 「令和 4 年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 「令和 5 年度学術集会支援助成金の贈呈対象学術集会」の決定
4. 「令和 5 年度～令和 6 年度理事候補者」の決定
5. 「令和 5 年度～令和 8 年度監事候補者」の決定
6. 「第 24 回評議員会（定時評議員会）の日時及び場所並びに議事に付すべき事項」の承認
7. 執行理事（神谷茂理事長、遠藤弘良専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

◇第 36 回理事会

（令和 5 年 6 月 8 日）理事総数 6 名 出席者：理事 6 名 監事 2 名

1. 「令和 5 年度～令和 6 年度代表理事（理事長）」の選定 ※代表理事：神谷 茂
2. 「令和 5 年度～令和 6 年度執行理事（専務理事、常務理事）」の選定
※専務理事；建野 正毅、常務理事：岡田 護

◇第 37 回理事会

（令和 6 年 2 月 15 日）理事総数 6 名 出席者：理事 5 名 監事 2 名

1. 「第 50 回学術研究助成金受贈者」の決定
2. 「第 50 回大山健康財団賞、令和 5 年度大山激励賞及び第 6 回竹内勤記念国際賞」受賞者の決定
3. 「令和 6 年度事業計画書（案）」の承認
4. 「令和 6 年度正味財産増減予算書（案）」の承認
5. 「第 25 回評議員会の日時及び場所並びに議事に付すべき事項」の承認
6. 執行理事（神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

『評議員会』（令和 5 年度）

◇第 24 回評議員会（定時評議員会）

（令和 5 年 6 月 8 日）評議員総数 9 名 出席者：評議員 7 名 理事 6 名 監事 2 名

1. 「令和 4 年度事業報告書（案）」の承認
2. 「令和 4 年度決算報告書（案）」の承認・「監事の監査報告」
3. 「令和 5 年度～令和 6 年度理事」の選任
4. 「令和 5 年度～令和 8 年度監事」の選任
5. 執行理事（神谷茂理事長、遠藤弘良専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

◇第 25 回評議員会

（令和 6 年 3 月 14 日）評議員総数 9 名 出席者：評議員：7 名、理事：6 名、監事：2 名

1. 「令和 6 年度事業計画書（案）」の承認
2. 「令和 6 年度正味財産増減予算書（案）」の承認
3. 執行理事（神谷茂理事長、建野正毅専務理事、岡田護常務理事）の職務執行状況報告

VIII. 内閣府関係

◇『定期提出書類等』（電子申請）

（1）事業報告等の提出

- ・令和 4 年度の事業報告書及び決算報告書の提出（電子申請による関連報告を含む）

提出：令和 5 年 6 月 29 日、修正：令和 5 年 8 月 17 日、8 月 22 日

完了：令和 5 年 9 月 14 日

（2）事業計画書等の提出

- ・令和 6 年度の事業計画書及び正味財産増減予算書の提出

提出：令和 6 年 3 月 29 日 令和 6 年 4 月 24 日現在審査中

以上

[附属明細書]

令和5年度事業報告書には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。

令和6年5月
公益財団法人 大山健康財団